

昔女、物の怪わづらひし所に、物の怪わたしし程に、物の怪、物つきにつきていふやう、「をのれは、たたりの物の怪にても侍らず。うかれまかり通りつる狐也。塚屋に子どもなど侍るが、物をほしがりつれば、かやうの所には、くひ物散りばふ物ぞかして、まうできつるなり。しとぎばらたべてまかりなん」といへば、しとぎをせさせ、一折敷をしきとらせたれば、すこし食ひて、「あなうまや、あなうまや」といふ。

「此女の、しとぎほしかりければ、そらものづきてかくいふ」と、にくみあへり。「紙給はりて、これ包みてまかりて、老女や子共などに食はせん」といひければ、紙を二まい引きちがへて、つつみたれば、大やかなるを腰にはさみたれば、むねにさしあがりてあり。

かくて、「追ひ給へ。まかりなん」と、驗者に「いへば、「追へ追へ」といへば、立ちあがりて、たふれふしぬ。しばしばかりありて、やがておきあがりたるに、ふところなるものさらになし。

失せにけるこそふしぎなれ

---

「主語は誰か、文脈の意味から常識的に主語を捉える。

主語は誰か